

## 同窓会会長賞

### 「四畳半神話大系」

森見登美彦（角川書店）

情報メディア学科 中川麻鈴

生きていく上で、「あの時違う道を選んでいれば……。」「もしも時間を巻き戻せたら……。」と後悔する場面は必ずと言って良いほど訪れるだろう。しかし、過去は変えることが出来ないもの、と世間では考えられており、いくら戻ってやり直したいと願っても、それは大抵叶うことのない夢に終わる。だが、そんな夢がもし実現したらどうになってしまうのだろうか。

本作、『四畳半神話大系』は4話から構成されており、その全てが並行世界にある。つまり同じ時間を何度も何度もループしているのだ。

時は春。ぴかぴかの大学生になった主人公の「私」は、薔薇色のキャンパスライフという希望に胸を膨らませていた。これまでの冴えない人生と決別し、素敵な大学生活を送るため、1話では映画サークルに入り、2話では樋口という先輩のもとに弟子入りし、3話ではソフトボールサークルに、4話では秘密組織「福猫飯店」に入る。

ところが、毎回悪友の小津に振り回され、理想のキャンパスライフとは程遠い毎日を送るのだ。どの道を選んでも、冴えない「私」の人生はやはりどこか冴えない。

だがそんな中でも最終的には必ず、孤高の乙女・明石さんとめでたく結ばれることとなる。言い方を変えれば、「私」はどんな行動をとっていたとしても、出会うべき人間には必ず出会う。運命や宿命、という言葉は物凄く不確かなものだが、もしかしたら本当にこの世に存在するのかもしれない。本作の世界観に触れて、その可能性を大いに感じた。

この作品で描かれている理想と現実のギャップ。共感する人も多いだろう。「私」の大学生活もまた、充実しているものとは言えないが、一方で何気ない出来事が面白おかしく書かれており、どこか楽しそうに見えるのだ。自分の気持ち次第で世界は違って見えてくる。

いわば捉え方次第なのだ。忘れかけていた大切な事を本作は気付かせてくれた。

毎日をもっと充実させたい人に、この本を是非お薦めしたい。